

2018 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	教授	中山 孝男
最終学歴	学 位	専門分野
一橋大学大学院経済学研究科博士課程 単位修得満期退学	経済学修士	経済学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

一昨年度から担当している「総合ビジネス基礎」、昨年度から担当している「流通経済論」の授業内容の改善をはかり、さらに今年度から新たに担当することになった「学びの基礎Ⅰ・Ⅱ」の授業を通して学生（とくに1年生）の基礎学力を確かなものにするを第一の目標としたい。他方で、長年担当している「経済学」については、受講生約150名の大人数クラスもあるので、いかにして講義内容に興味を持たせるかに幾重もの工夫が必要となる。受講学生の反応をよくつかみながら毎回、毎回努力していく。

(計画)

アクティブラーニングの視点を持ち、少人数クラスはもとより、大人数クラスであってもできるだけ対話的な要素の多い授業を行う。毎回とは言えないが、小テストの実施及びそのフィードバックは言うまでもない。

○担当科目（前期・後期）

（前期）総合ビジネス基礎、経済学、学びの基礎Ⅰ、基礎演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）流通経済論、国際関係論、学びの基礎Ⅱ、基礎演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

○教育方法の実践

- ・「総合ビジネス基礎」は、受講者数166名で、双方向的授業を実践することは極めて難しい状況だったが、それでも7回の小テストを実施し、毎回採点したうえで返却した。こうしたことにより、昨年までの授業よりも内容的によりよくなったと考える。
- ・「経済学」は、受講者数149名と78名の2クラスであった。人数の少ない方の授業では受講者一人一人の名前を覚え簡単な質問をして答えてもらう方式で授業を実施できた。言うまでもなくこちらの教室では私語はほとんどなく、良好な環境で授業ができた。もう一方のクラスは、さすがにそのようなわけにはいかなかった。私語も多かった。大人数（しかも3学部の学生混合）の授業をどのように行えば、興味と理解とを両立できるのか、私にとって長年の課題である。
- ・「学びの基礎Ⅰ・Ⅱ」とも、約70名の受講者であった。適切な人数であったし、何よりも全員経営学部地域ビジネス学科の学生で、入学前から顔を知っている者も多く、よい雰囲気での授業を進めることができた。今年とはとくに「割合」に関する内容を集中的に扱った。そのため、学生によるアンケートに「割合がわかるようになった」とのコメントが寄せられた。来年度は、より改善していきたい。
- ・「流通経済論」は、今年度が最後の開講であり、4年生以上の学生のみ受講が可能な科目であった。当然、受講者（名簿上18名）は互いによく知っている学生同士がほとんどであり、ほぼ完璧に双方向的授業が実践できた。

- ・「国際関係論」は、今年度初めて開講する授業であった。国際ビジネス学科第1期生（3年生）のみ受講ができ、時間割の関係からか留学生3名のみの受講者であった。そのこともあり、国際経済に関するテキストを用いて、基礎から丁寧に理解できているかどうかを確認しながら進めた。言うまでもなく、双方向授業は実践できた。

○作成した教科書・教材

- ・前期「学びの基礎Ⅰ」、後期「学びの基礎Ⅱ」用のテキスト『学びの基礎Ⅰ』『学びの基礎Ⅱ』の（一部）執筆と全体を編集した。

○自己評価

学務に対して担当科目数が大幅に超過する、忙しい1年であったが、何とかつつがなく授業できたと思う。来年度は、特に「経済学」で授業の方法を変え、単にテキストを説明すればよい、という姿勢を改め、現実の経済社会を理解できるように授業を組み立てようと考えている。

II 研究活動

○研究課題

D. リカードウ=T. R. マルサス論争史研究

○目標・計画

（目標）

昨年度に引き続き、上記テーマで主に両者の労働需要論に焦点をあて、『リカードウ全集』第2巻「マルサス評注」を精読しつつ、新たな論点を発見していく。

（計画）

とにかく原典回帰で18世紀初期のイギリス経済学会のようすを部分的にでも復元する気概をもって一步一步読み進める。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

（学術論文）

- ・中山孝男「リカードウ『機械論』章に関する一考察」『東邦学誌』第42巻第1号、2013年6月
- ・中山孝男「リカードウの新機械論再考（下）——マカァロクとの往復書簡の検討を中心として——」『東邦学誌』第40巻第2号、2011年12月
- ・中山孝男「リカードウの新機械論再考（上）——マカァロクとの往復書簡の検討を中心として——」『東邦学誌』第40巻第1号、2011年6月

（その他）

- ・中山孝男・手嶋慎介・大勝志津穂・正岡元・小柳津久美子「2012年度共同研究：（研究課題）「iPod touch/iPadを利用した教育手法の開発と研究」活動報告」、『東邦学誌』第43巻第2号、2014年12月

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

なし

○所属学会

経済理論学会、経済学史学会、マルサス学会、政治経済学・経済史学会

○自己評価

学務と講義の準備で多忙を極め、十分な研究活動ができなかった。来年度も、今年度のテーマを引き続き継続して研究活動を続けたい。なお、経済理論学会の東海部会会場大学の担当者として、学会活動にはささやかではあるが貢献している。また、授業評価アンケートの結果に関する学生代表参画FDも本学史上初めて開催することができた。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

(目標)

学内理事として学園全般の運営に責任をもってあたる。とくに、労務担当、自己点検・評価、衛生委員会、情報マネジメント会議、等の各分野では重責を担うこととなるので、視野を広くもち、慎重な判断をしていく。

(計画)

一般の教員とほぼ同数の授業を担当しつつ、上記業務をこなさなければならないので、諸会議の日程を長期的に考慮し、計画的に業務を遂行していく。

○学内委員等

常任理事会構成員、教学法人協議会構成員、衛生委員会委員、自己点検・評価委員会委員、経営政策会議構成員、高大連携会議構成員、情報マネジメント会議議長、運営委員会委員、学長会議構成員、人事委員会委員、教育力向上委員会委員長

○自己評価

学内理事に就任し、今までとはかなり異なる会議体に参加するようになり、それなりに神経を使うことが多かった。来年度もほぼ同様な業務量が待っているが、今年度よりは効率的にこなしていけるよう努力する。

なお、教育力向上委員長として、岐阜経済大学との合同FDを実施できたことは、本学に対して少なからぬ功績であったのではないかと自負している。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

(目標)

本学での教育・研究活動の成果をできる限り地域社会に還元する。

(計画)

高大連携授業や、高校からの出張講義要請にできる限り応じ、社会貢献をする。また、所属する経済理論学会の東海部会開催校として学会活動にも積極的に協力する。

○学会活動等

上述のように、経済理論学会の東海部会会場校として、年2回の研究会開催に協力した。

○地域連携・社会貢献等

とくになし

○自己評価

東邦高校との高大連携授業に協力した。参加高校生は、2年生の10名程度であったが、約90分間高校生の反応を見ながら「アベノミクス」に関する様々なデータを紹介しつつ経済学の授業を実施した。

Ⅴ その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

なし

Ⅵ 総括

・教育については、平均並みかそれ以上の実践ができたと考える。

- ・研究については、まったく不十分にしかできなかった。
- ・大学運営については、平均以上の仕事をした。
- ・社会貢献については、例年並みのことしかできなかった。

以 上